

ディヤコニア



説教

「あなたの罪は赦された」

牧師 森 史子

ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったため、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。

(ルカによる福音書5章17〜20節)

主イエスは中風の人を癒されました。

中風とは、脳血管障害の後遺症のことです。

す。この人は、寝かされた状態で運ばれているので、半身不随や麻痺などで起き上がることもできないほど重症だったと思われまます。マルコ2章では、「4人の男が中風の人を運んできた」と書かれています。どの様な関係なのかは書かれていませんが、病人の癒しを切に願い、何としても主イエスのもとに連れて来たい一心で臥したままの状態で運んできたのです。ところが入口まで人が溢れていて中に入ることもできません。普通なら諦めて出直すことを考えるでしょう。でも

彼らは諦めず、なんとその家の屋根を壊して病人をつり降ろしたのです。大胆で迷惑な行為に人々は、さぞ驚き困惑したことでしょう。主イエスに対しても、ゴミや埃が降る中で突然病人を目の前に降ろすのですから失礼な行為でもあります。しかし、主イエスはその人たちの行動から、ご自分に対する「信仰を見た」と言うのです。そして主イエスは、中風の人を癒されました。

その人たちとは、4人の男性と中風の

人です。主イエスが彼らの中に見た信仰とはどの様なものなのでしょう。

主イエスの視点に立つと3つのことを教えられます。

1つ目は、困難な状況でも、主イエスとの出会いを諦めなかったこと。主イエスを求める強い思いから、諦めない大胆な信仰が生まれるのです。

2つ目は、主イエスに近づき、主イエスの言葉で赦され癒されたいと願ったこと。主イエスの語る言葉には、癒しの力があることを彼らは知っていました。

主イエスは中風の人に「人よ、あなたの罪は赦された」と言われました。当時の人々は、病を罪の結果だと考えていました。人が神に背いて律法を破り罪を犯したので、神が罰として病を与えたと考えています。病人は神に見捨てられ呪われた者と思われていました。だから主イエスが病を癒していると言うニュースは、彼らには生きる希望であり、病の癒しは、罪の赦しと解放でもあるのです。救いの道は、主イエスの語る言葉にあると信じ

る信仰です。

3つ目は、愛の交わりです。中風の人を救うために4人の仲間が助けています。その姿は必死で、大胆で、犠牲的です。

中風の人は、一人では動くこともできない状態でしたが、4人の助けを受けて主イエスに出会うことができ救われました。彼らは仲間のためなら、自分の時間や労力などの犠牲を払うことができたのです。これは、交わりの中で生まれた思いであり、これが愛です。一人では困難だと消極的になりがちですが、同じ思いの仲間がいればいるほど勇氣や力が与えられます。そして、彼らの祈りの声は、確実に主イエスに届いています。主イエスは、この交わりの中に信仰を見たのです。この中心にあるのは、主イエスへの信頼と愛です。

この愛の交わりは、主イエスを頭とする教会に多く見られますが、それだけでなく、様々な支援の現場の中にも見ることができま

す。いづみ寮の職員の頃から毎月開いてい

る聖書の会の中でも、重い荷物（問題）

を背負った利用者が、主イエスの存在を知り、一緒に祈ることで力を受けて自立していく姿を見せて頂いています。その陰には、職員たちの励ましや担当者の寄り添う支援が積みま

4年前から始まった、いづみ寮の退寮者の地域生活を支える地域サポーターシステムでも、一人では出来ない・行けない・解らない問題をサポーター（ボランティア）が一緒に解決に向け支援しています。ほとんどの退寮者は、一人暮らしに孤独と不安を感じています。一緒に過ごす時間は退寮者とサポーターが、喜びや楽しみ、緊張や不安を共有する時になっていきます。一人じゃない、仲間がいる。この事実が、地域生活を広げていく力になっています。

地域で暮らすDV被害者のためのグループ「ぶどうの木」を個人的に始めてから10年になります。暴力や虐待を受けた経験のある方々が、安心して話せる場

と情報交換や相談を中心集まっています。

暴力のない社会・安全な生活を指して活動していますが、最も大切なことは魂の平安です。トラウマに苦しむ女性や子どもの癒しは、止むことのない課題です。中心メンバーは全員クリスチャンなので、聖書と祈りを土台にして取り組んでいます。現在は、主イエスの助けを受け、被害者である方が支援者へと変わって、苦悩する被害者の相談を受けています。安心安全な心の居場所を求めて集まる女性たちが、主イエスの癒しと救いによる解放を受けることができますように、大胆に求めて祈っていきたく願っています。

ディアコニア289号召命と献身より「我々は、何を持って献身するかではなく、何をすてて献身するかを問題としているのである。」深津先生のことばです。

「ベテスタ奉仕父母の家」を60年以上支え導いてくださった神に感謝を捧げて、栄光を帰します。

キリストの愛をはこんだ人々

テオドル・フリートナー

ディアコニーの尊い仕事に功績のあつた数々の人の列伝のうちで、第一に挙げられねばならぬ人は、申すまでもなくフリートナーでありましょう。まだ誰一人そのことを考えなかつたとき、何人もおよばぬ深い聖書への洞察と驚くべき勇気をもつて、ふたたび使徒時代の愛の奉仕を再現し、これによって計り知れぬ豊かな生命を現代の教会にあたえた人は彼でありました。

そのテオドル・フリートナー (Theodor Fliedner) とはどんな人だつたのでしょうか？ 西ドイツの一小村エップシュタイン (Eppstein) の牧師の12人兄弟の第4子として1800年1月21日に生をうけた彼は、はやくもその両親から人間の苦悩に対する開かれた眼をさずかつていました。13才にして父をうしない、20才にして優秀な成績で大学の神学部を卒えましたが、将来の仕事に

たいする畏敬から尚1年間ケルンの実業家の家庭教師をして暮しました。そしてはじめてライン河畔のカイザーズウェルト (Kaiserswerth) の小さな教会に招かれたとき、彼は大きな熱心をもつてその牧師職を履行しました。老いたる母の荷を軽くするため一番下の弟2人と1人の妹とを引取つて世話をしながら……。

ところがその教会の有力な会員の工場が破産し、彼は他に転ずるよう頼まれましたが、受入れませんでした。多くの祈りののち、おそるおそる彼がはじめたのは、町々をあるいて施しを乞ふことでした。ところがこの冒険が彼に勇気をあたえ、その足はオランダからイギリスにまで及び、到るところで温かくむかえられたのです。

フリートナーがこの旅行で得たものは、金銭だけではありませんでした。彼は多くの尊ぶべき人格に出会い、ことにオランダやイギリスの良く運営されている社会施設を見ることができたのです。ようやく成熟してきたフリートナーは自分もそういうことをしたいと願うようになり

ました。小さな教会の仕事は彼の時間をことごとくは要求しませんでしたので、彼はまずデュッセルドルフの刑務所へいつて定期的に囚人の礼拝をひらきました。数週間受刑者とともに生活することもしてみました。彼の温い執成しによつて囚人援護団体が結成されました。女囚のための信仰ふかい看護婦をさがして彼の妻となつたフリーデリケ・ミュンスター (Friederike Munster) にもめぐりあいました。1833年フリートナーは牧師館の庭先にある10尺四方の家にはじめて放免女囚をひきとりました。そして3年ののちには彼の生涯の課題となつた奉仕女の仕事をはじめねばならなかつたのであります。

以前からフリートナーの脳裏には、使徒時代の愛の奉仕を行う人々を新教のなかにも再興しなければならぬという考えがありました。それはむしろキリスト者女性に負わせられた使命ではあるまいか？ けれども斯る重大な仕事をはじめるのはむしろ大都市の牧師でなければならぬ。そう考えて、適任とおもわれる

友人の牧師たちに相談しましたが、彼らの答えは「君がはじめればよからう」でありました。かくて彼は神の御手からこの業をうけてカイザースウェアト最大の建物を購入する冒険をしたのです。フリートナーに最初に従ったゲルトルート・ライヒアルト (Gertrud Reichardt) は、すでに数年のあいだ父の手助をしていた医者の娘でした。まもなく他の志願者もつぎきました。ゲルトルート姉と一人の医師が彼女たちを教育し、フリートナー夫人が全般の運営にあたり、フリートナーはおもに信仰の訓練にあたりました。

創立20周年には250人の奉仕女と177人の志願者が59の場所でキリストの愛のために働いたのです。その全体のための配慮——ことに一人一人の姉妹を正しい働き場におくること——はフリートナーの役目でありました。そのために彼はしばしば旅し、働きに疲れた姉妹を母の家の教育の任務につれかえりました。病気のための仕事のほかに、彼は幼児教育の保母や初等教育の女教師のために学

校をひらき、その多忙のために1849年教会をしりぞきました。

フリートナーは妻フリーデリケにまことの協力者を見出しました。しかしその課題はあまりに激しく、11年のうちに彼女は他界しました。母を失った子供たちと施設のために第二の妻カロリーネ・ベルトーを与えられたことは感謝でありました。病苦にさいなまれたる身をもって、はるかパレスチナにまで奉仕の業をおし

すすめ、おわりの7年間苦痛おき病床からさえも多くの激励と智慧とをあたえつつ1864年10月4日天の故郷に凱旋しました。

その墓石に刻まれている聖句は——わが父に祝せられたるものよ、来たりて世の始めより汝等のために備えられたる国を嗣げ(マタイ25:34)——であります。

〈エリザベト・フョリンガー〉

ただひとりあり

Ruth Schaumann Nur einer kann uns leiten Hermann Simon



1954.5 深津文雄訳

施設だより

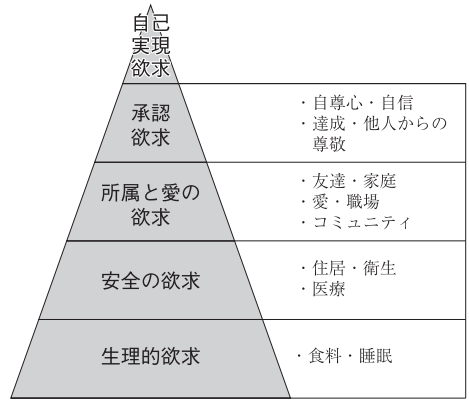
日々の生活と自尊心の回復

中川 浩子

いずみ寮で暮らす女性たちは、これまでの生活でさまざまな暴力にさらされ、たくさんの傷つきを経験してきました。そのせいで、たいがいが自尊心を根こそぎにされています。信じていた家族や組織の裏切りや搾取を経験したのですから、自分の価値観や選択に自信がなくなってしまうのも当然といえは当然です。いずみ寮で働くようになって3年が経とうとするこの頃、臨床心理士としての私のここでの役目は、この自尊心を女性たちが取り戻すプロセスの伴走者なのだろうという理解に落ち着きました。

自尊心とは「自分が好き」「これでいいんだ」と思う気持ちと言い換えることができるでしょう。そして誰でも、自分のことを嫌いになると、この先の人生を好転させるためのモチベーションが湧き

ません。アメリカの心理学者のマズローは人間が自己実現的に(自分らしく)生きるための欲求には五段階あると言いました。



【図 マズローの欲求の5段階説】

す。しかし、その前に「生理的欲求」、「安全の欲求」を十分に満たさなければ、いくら「より良く生きる」、「自立」と言ったところでそれは難しいのです。

低い方から「生理的欲求」、「安全の欲求」、「所属と愛の欲求」、「承認欲求」、「自己実現欲求」です。「生理的欲求」、「安全の欲求」までは人間が生存するための基本的欲求(≡物質的欲求)と言われるものです。成長する、夢を叶えるといった自己実現に関係する欲求(≡精神的欲求)は最も高いレベルの欲求であり、これが「より良く生きる」を可能にしま

いずみ寮で生活する女性たちは、ここまで生き延びるのが精いっぱいだった人たちです。前述した「生理的欲求」、「安全の欲求」の欲求が満たされない生活を長く送ってきました。生存のための欲求が常に危機的な状態のホームレス経験が女性の心理に与える影響は複雑かつ甚大で、欲求が満たされたからといってすぐに自己実現の欲求が湧いてくるわけではありません。最近のアメリカの心理学者が行った研究は、自尊心低下と衛生(トイレやシャワー、生理用品、性被害に遭わないシエルトーなど)へのアクセスがない経験をしたホームレス女性は、自分の身体について良いイメージを持ちづらく、そのため健康的な生き方を選択できず肥満になりやすいことを明らかにしました。この研究結果は、「生理的欲求」、「安全の欲求」の欲求を満たす過程に、利

用者と支援者がどれだけ丁寧に取り組むかが鍵だと示しています。そこに時間を割いて取り組めば、人間が生まれながらにもつ自己実現傾向が開花して、女性たちは自律的に健康管理をし、再び前に進むことができるようになるのです。

いずみ寮では、おいしくて栄養のバランスの取れた食事、入浴、安心して眠れる部屋を提供するところから支援が始まります。これは実は女性たちの心理に直接働きかけるアプローチであることが、前述したマズローの理論を参照すれば明確です。ですから、いずみ寮で暮らすことで「生理的欲求」「安全の欲求」が満たされ、そして集団生活で他の利用者や支援員との交流もあるので「所属と愛の欲求」も理論上は満たされるはずで、ついでに「梅ちゃん」という可愛い犬もいて癒してくれます。しかし、これだけの資源があっても、すぐに高次の欲求に向かって歩き出せるわけではありません。実際に、利用者女性が心の底から実感し安心感を得るのには年月を要します。

先ほどのホームレス女性に関する研究に関連することで言えば、例えば、いずみ寮の女性たちの多くは肥満傾向で体重コントロールに苦労しています（少数ですが拒食傾向の人もいます）。お菓子などを食べ過ぎてしまう人、野菜嫌いなど極端な偏食があり、健康的な食生活を拒絶しているようにさえ見えます。もう一つ、最新式のきれいな風呂やシャワーが整備されているのに、入浴したがる人もいません。こういった、自分の身体を大切にしない不健康な行動パターンの修正は、栄養士や看護師、支援員、心理職が介入してもなかなか進まないのが現実です。

考えてみれば女性たちは20年、30年、あるいはもっと長い年月、支援なしで、彼女たちなりのぎりぎりの生き残り策を講じながら生きてきたのですから、それは急に変更できないのが当たり前。そんな彼女たちの来し方も受け入れ尊重しなくてはならないのだな、といつも自分言いかせています。

利用者さんとの日々のやりとりの中で、少しでも自尊心を取り戻してもらうために気をつけているのは、まずはダメ出しはしないことです。かなり徹底的に否定的な言葉は使わないでコミュニケーションをとることを心がけています。例えば睡眠が課題になっている人に対して「毎日7時間寝ないとだめですよ」ではなく、「毎日7時間寝れたらもつと良いですよね」など、同じことを言うにも言い方を工夫しています。小さなことですが、少しでも肯定的なメッセージを送るよう努めています。

「ここは安全です」、「もう誰もあなたを襲いませぬ」と言葉で語りかけると同時に、日々の暮らしを大切にしながら、焦らずゆっくり女性たちと前に進んでいきたいと思っています。

その中で、女性たちが「自分が好き」「これでいいんだ」と、少し先の未来を見ながら思えるようになる日を信じて待ちたいと思います。

(いずみ寮 心理職)

法人の歴史

かにた婦人の村編⑤

今も語り継がれる、礼拝堂建設工事に携わった人々の情熱と苦勞。

1960年、いずみ寮を訪問した矯風会大阪支部長の阪田京さんは、まだ幻であつたコロニーに「礼拝堂を」と訴えた一寮生の叫びを聞き逃さず、大阪支部で20円献金袋2万5千円を配り、50万円を集めてくれた。その後アジア各国からの「リストコイン」、ドイツやスイスからの遺産などが、会堂のために寄付された。しかし、なかなか建設資金が満たず、その時めかれた種が形となるには開村後16年という歳月が必要であつた。

「納骨堂付礼拝堂」建設に着手するきっかけとなつたのが、1980年1月の深津文雄の朝日社会福祉賞受賞であつた。深津は、副賞の100万円を何に使うかと聞かれ、「納骨堂」と答えたという。「自分も入ることを考えてのことだつた

であろう」と深津春子は書き残している。

年度末の本部予算理事会で、チャペル建設を決定。自分たちの手で土地を開墾し、ブロックを一つずつ積み、山の木を製材して床を張り、全て手作りの建物を全職員と村人の共同作業で建てようという無謀な大事業。この村が始まって以来、困難な作業は「総動員」という言葉を用いて村人全員でやつてきた。今度は一人一人力を出し合い、重い重い石を動かし、その向こうに開ける新しい夢を実現したいという気運が強まる。「共同作業という大冒険」の始まりであつた。

1981年8月7日17時15分、16年間、だれ言うことなくチャペルサイトと呼んできた山頂の広場に全員集合し定礎式を行う。コラル「主よ我ら立つ」で始まり、詩篇127篇「主御自身が建てて下さるのでなければ家を建てる人の労苦はむなし」を心に留め、鍬入れ。農園全員で準備した大きなキャンプファイアーを囲み、会堂建設のため大いに食べ、大いに歌い、心一つにして氣勢を上げる。

9日、基礎工事を手伝うため、上尾合

同教会の青年たち延23名が洞窟に6泊し、炎天下、会堂の地下室予定地土台作りに挑む。固い岩盤をつるはして掘り、その石を運び、溝堀り、土運び。きつい仕事であつた。続いてLBFによる鉄筋組みが行われた後、職員全員の共同作業に入った。その作業の大変さと喜びが語られている「かにた物語」の一文をそのまま抜粋してみよう。

「仕事の都合で、23日の祭日は返上。ボランティアになつたつもりで共同作業。さらに24日、30日も連日働いた。その上30日は「ナイター」と称し、大鍋に味噌汁を作り、寿司を取る。農園からは熟したトマトを冷やしてどっさり差し入れてくれた。囲いの立ち上がった納骨堂、足場のわるい現場、あちこちから拾い集めた材木の切れ端に腰をおろし、いまだ経験したことのない飯場風景よろしく、冗談を飛ばしながらの夕食。

10月に入ると「朝6時に集合」などという日もあつた。5日にはコンクリートミキサー車22台が終日山を往復。納骨堂の外壁ワタにドロドロのコンクリートを

流し込む。待つてましたとばかり、力の
ある養生や女子職員が、鉄筋でその中を
つつつき、空気が入らないように平均化
していく。

白いヘルメット30個購入。12日は納骨
堂の桧板をはずし、パイプも取り下ろす。
さらに男坂（管理棟の前面からチャペル
サイトに通じる急こう配の非常階段）か
ら1本ずつ、ゆつくりゆつくり管理棟前
まで下して片付け、終日、緊張のいる重
い作業だった。

しかし、型枠を外してみると、中から
コンクリートの美しい肌が出てきて一同
歓声を上げる。

その間に、農園は本来の作業、稲の脱
穀を全部終わらせ、畑の堆肥まき、果樹
の下草刈り、牛、豚の世話と小止みなく
続き、冬野菜の播種、落花生の収穫、長
ネギの土寄せ、サヤエンドウ、小松菜の
播種も忘れてはならない。」

「会堂もいよいよ完成が近い。素人棟
梁では計算通りにはいかず、さまざま
難問題にぶつかり頭を抱え込むこと幾度
か。しかし、職員たちの強力な支えに

よって最後までやり遂げられたのである。
見ていて一番こわかったのは、いよいよ
屋根になる巨大な集成材を会堂のプロッ
クの上に持ち上げ、組み立てる時。1本
ずつ毛布にくるみ、高く上げ、最後に真
上で左右をとめる。身の軽い鈴木忠徳さ
んと力持ちの重田忠さんのコンビがいな
ければ集成材屋根の棟上げは不可能だっ
たかもしれない。」

1982年の12月に入ると共同作業は
月々金、連日連夜、急ピッチで続いた。

16日、無事会堂竣工検査が通り、翌日深
津が世界的オルガン建造家辻宏氏と共に
イタリア・ピストイアで出会って心奪わ
れた「澄んだ柔らかな天上の和声」をも
つジェンテイーリ・オルガンの複製が運
び込まれた。25日の降誕祭は未完成の会
堂で行われ、感謝の思いにみたまされた。

翌年2月、床暖房の工事、暖房器具の
上にモルタルを塗り、その上に男子職
員全員で5時起きして伊豆河津からト
ラック3台で運んできた伊豆石を貼る。
会堂地下納骨室の伊豆石貼りを職員養生
19名で完了させ、納骨棚作りをLBFの

5名と共にする。16か月の苦しい激しい
戦いの末、ついに納骨堂付礼拝堂完成。

1983年11月16日、初めての納骨式
がおこなわれた。折よくボストンから来
日したオーガニスト林祐子女史の深い祈
りの心を持った奏楽の響く中、聖歌隊に
抱かれた5名の遺骨が納められた。

「君たちが死んだら僕が葬式をしてや
ろう。僕が死んだら君たちがしてくれ。
そうして、ここに一緒に眠ろうな」

その言葉どおり、引き取り手のない村
人46名が深津文雄・春子と共に「もうひ
とつのかにた」に住んでいる。かつて、
かにたで共に生活したシュベスターし
ぶも、シュベスター操も一緒に。

「『かにた』という、空前絶後の成功と
失敗が、正しく記憶され、その祈りが、
あやまりなく伝えられること」を願い、
「さらに、はるかなる、グローバルな『カニ
タ』の展開をゆめみつ」と記した深津
の思いは、五十嵐逸美施設長のもと、新
たな展開を見せようとしている。

（天良さゝ子）

*参考文献「かにた物語」

梅のつぼみもふくらんで春はそこまで
と思いつつも風の冷たさに肩をすぼめ、
あと少しの間という春間近を覚えます。

祈りの友の皆様も、お元気でいらっ
しゃるでしょうか。庭の片隅で、ふきの
とうが、顔を出しています。そう、今夜
はお味噌汁にしてみましたか。

自然の恵みに感謝して、生かされてい
ることを賛美したいと思います。

小川 都代

二十数年前のことになります
が、東京で開かれた「水俣展」
を見に行き、被害者の方とお会
いして、直接お話を聞きました。

企業と人間の絶望的な関わり
に啞然としました。

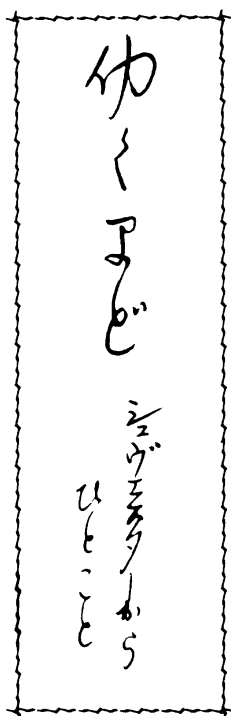
以前に知人が「足尾鉍毒事件」で亡く
なり、その時は現地に行つて様子を見、
(故)田中正造氏の告発など、恐しかった
ことを思い出しています。

「水俣病」で現在も苦しみ呻く声忘れ
られず、石井礼さんが亡くなり、命の大
切さを思います。

細井 陽子

食べること。出すこと。歩くこと。あ

たりまえの動作も一つ一つ心して動かね
ばならないこの頃、これが老いと言うも
のかと思わされています。先輩の方々も
みんなそれぞれこの様な道を通つて行か
れたのでしょうか。思えば私の思いやりの
少なさを反省しています。あの時こんな
に辛かったのでしょうか。眞山知恵子



術後はや一年過ぎぬ今朝の春

毛糸編むこともリハビリ一目づつ

皺の手の美しきかな冬の水

寒梅や齡八十九となりぬ

植木 道子

「家には一人を減じたり、されば天に
一人を増しぬ」。昨年は12月にお一人を、
本年1月元旦にお一人、2月17日にお一
人、三人の愛する友を天にお送りし、先
の言葉をかみしめています。既に天に在
る「かにたの大家族」に迎えられています。
どのような言葉で迎えられ、どのよ
うな会話がなされているのでしょうか。

想像し合う思いの中に、
お一人一人がとどまっ
てくださっています。

天羽 道子

相浜ガーデンでの生活
も5年余になりました。

昨年手術を受けた右肩
もほとんど回復し、リハビリを受けなが
ら右手もしっかり使えるようになり、お
食事もおいしく頂いて元気です。

昨年も、かにたのクリスマスス札拝に、
車椅子で参加でき、共に歌いました。村
の姉妹たちからのやさしい声かけがとて
も嬉しく、楽しいひと時を過ごしました。

桜庭 歌子(天羽)

賛助金・クリスマス献金 ありがとうございます

日本基督教団広尾教会・代表米山恭平

青山学院初等部 秋津教会 安東優 安

里美代子 飯久保芳子 入笠山讚美の家

五十嵐順子 五十嵐敏子 池田直子 石

塚久江・八重 市橋みはる 伊藤瑞男

井上京子 今井佳代 今井直子 岩崎裕

子 江村政子 大沢真理子 大洲幼稚園

大沼昭彦 大宮洋子 大柳龍一郎 鹿島

信義 武庫川幼稚園 彰栄学園宗教委員

会 頌栄女子学院 東北学院理事長 松

本 稚内ひかり幼稚園 加藤明彦 加藤

大 加藤美都子 上富坂教会 川上邦子

菊地幸男 北島あづさ 京都復興教会

峡南幼稚園 金城学院大学 キリスト教

センター 久保川守 熊田てる子 黒川

裕子 敬和学園大学キリスト教教育委員

会 神代英理 小金教会婦人会 小谷志

保 小林充子 斎藤仁一 酒井忍 坂口

順治・節子 佐藤元紀 柴田とよ子 柴

山操 島田百合子 牧ノ原やまばと学園

鈴木和男・奈都子 鈴木純子 聖学院小

学校 関本郁子 捜真女学校高等学部

捜真女学校中部 田澤文雄 但野明子

田中裕子 玉城吉重 田村和子 筒中克

子 手島康光 東洋英和女学院小学部母

の会 東洋英和女学院中部 高等部母

の会 東洋英和女学院中高部宗教委員会

富山紗和子 中川節子 中村由紀子 西

村多見子 日本基督教団阿佐ヶ谷教会

日本基督教団大泉教会 日本基督教団

清水ヶ丘教会 日本基督教団信州教会

日本キリスト教団松戸教会 日本基督教

団三田教会 日本基督教団埼玉新生教会

女性の会 日本基督教団佐倉教会 日本

基督教団石神井教会婦人会 日本基督教

団新津田沼教会 日本基督教団新居浜西

部教会教会学校 日本基督教団西神美賀

多台教会 日本キリスト教団西千葉教会

日本基督教団東村山教会 日本基督教団

ひばりが丘教会 日本基督教団水戸中央

教会 日本基督教団門司教会婦人会 日

本聾話学校 貫井大輔 早田奏恵 原和

喜 広瀬公男 フェリス女学院中学校高

等学校 深田光代 深津恵太 伏木喬子

藤巻和司 藤巻恵子 藤巻契司 藤巻ひ

とみ 普連士学園宗教委員会ベテス姉

妹会 マリア福音姉妹会 丸山紀久子

宮田光雄 村田純一郎 村田多美子 村

田充子 目黒サレジオ幼稚園 森史子

森戸隆夫 森真弓 八巻紀子 大和キリ

スト教会支援委員会 山本洋子 余郷志

津子 横浜共立学園 横山信幸 吉田や

す子 霊南坂教会 横田碩子 鎌倉教会

関西学院宗教活動委員会 宮崎康久 黒

田恭介 三浦恒美 山本道子 自由学園

女子部卒業生会 松田君子 瀬戸真知子

聖園女学院高等学校中学校 浅野康子

中平安子 日本キリスト教団京都丸太町

教会 日本キリスト教団静岡教会 日本

基督教団翠ヶ丘教会 千歳船橋教会 平

手光明 野呂尚子 和田透

11月〜2月25日 (敬称略)



★理事会

第216回理事会 11月24日

於 茂呂塾保育園

【報告】

第1号 理事長並びに業務執行理事の

上半期執行状況について報告

第2号 かにた婦人の村建替え事業の

経過報告

【審議】

第1号 2017年度補正予算の件

法人本部、茂呂塾保育園、いずみ寮

かにた婦人の村、かにた作業所エマオ

第2号 かにた婦人の村建替え工事設

計監理業務委託の件——くろふね建

築研究所に委託する。

いずれの議案についても承認議決された。

第217回理事会 2月23日

於 茂呂塾保育園

【審議】

第1号 かにた婦人の村建替えに關す

る事業年度繰り下げ等の件——事業

内容及び事業日程の変更を行う

第2号 第二次補正予算の件

法人本部、茂呂塾保育園、いずみ寮、

かにた婦人の村、かにた作業所エマオ

いずれの議案についても理事全員の同

意並びに監事全員の異議確認において

承認議決された。

★2018年版「日々の聖句」

今年の「年の聖句」は

「神は言われる。

『渴いている者には、わたしが、命の水

の泉から価なしに飲ませよう。』」

黙示録21章6節です。

キリスト書店でなくとも、お近くの

書店で、「日キ販」経由とお申込みいた

くと入手できます。また、法人本部でも

販売しております。お申し付けください。

FAX 03・3921・4962

<https://bethesda-dmh.org/losungen/>

★編集後記

深津文雄牧師の「ディアコニアの原点」

に替えて、今号よりエリーザベツト・

フォーリンガー姉の「キリストの愛をは

こんだ人々」(全10回)を、初期のディア

コニより転載いたします。「法人の歴史」

は今号で終わります。皆さまのご要望に

応えて、法人の活動報告と共に、法人の

理念をお伝えする記事を掲載していき

たいと思っています。

(塩川)

主の大きいなる御名を賛美いたします。

昨年来、皆様からお寄せ下さいましたご

支援に心から感謝申し上げます。

今後とも引き続き、皆様の日々の祈り

の中でお覚え下さり、益々のご支援を賜

りますようお願い申し上げます。

(村田)

2018年3月15日発行(年3回)

発行人 大沼 昭彦

編集責任者 村田 英彦

印刷所 (株)印刷センター

発行所

〒178-0061

東京都練馬区大泉学園町7-17-30

社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家

電話 03-3924-2238

<http://www.bethesda-dmh.org/>

振替口座001900-2-138164